

日蓮大聖人御書全集

なんぶのろくろうどのごしよ

南部六郎殿御書

新版
1806
〜
1807

なんぶのろくろうどの(ご)しよ

南部六郎殿御書

ぶんえい ねん がつ にち さい はきいさねなが

文永 8 年 ('71) 5 月 16 日 50 歳 波木井実長

ねむ しし て つ いか なが 棹 た

眠れる師子に手を付けざれば瞋らず、流れにさおを立てざ

なみた ほうぼう かしやく るなん

れば浪立たず、謗法を呵責せざれば留難なし。

ぜんびく ほう やぶ もの み お かしやく

「もし善比丘あつて、法を壊る者を見て、置いて、呵責せ

お じ 恐 いま よ のち ご 覧

ずんば」の「置」の字をおそれずんば、今は吉し、後を御らん

むけんじごくうたが ゆえ なんがくだいし しあんらくぎよう い

ぜよ、無間地獄疑いなし。故に、南岳大師、四安楽行に云わ

ぼさつ あ あくにん しょうご じばつ あた

く「もし菩薩有つて、悪人を将護して治罰すること能わず、

あく じよう ぜんにん しょうほう はいえ

それをして悪を長ぜしめ、善人を悩乱し、正法を敗壊せ

ば、この人は実には菩薩にあらず。外には詐侮を現じ、常に

ひと じつ ぼさつ ごと ざぶ げん つね

この言を作さん。『我は忍辱を行ず』と。その人は命終

ことば な われ んにく ぎょう ひと みょうじゅう

して、諸の悪人とともに地獄に墮ちん」云々。

もろもろ あくにん じごく お うんぬん

十輪経に云わく「もし誹謗せば、応に共住すべからず、

じゅうりんぎょう い ひぼう まさ ぐうじゅう すなわ あびじこく

また親近せざれ。もし親近し共住せば、即ち阿鼻地獄に

趣かん」云々。梅檀の林に入りぬれば、たおらざるにそ

おもむ うんぬん せんたん はやし い 手折 ぜんこん

の身に薰ず。誹謗の者に親近すれば、修するところの善根こ

とごとく滅して、ともに地獄に墮落せん。故に、弘決の四に

めつ じごく だらく ゆえ ぐけつ し

云わく「もし人、本悪無きも、悪人に親近せば、後必ず悪人

い ひと もとあくな あくにん しんこん のちかなら あくにん

と成り、悪名天下に遍からん。

およそ謗法に内外あり。国家の二つこれなり。外とは、

日本六十六箇国の謗法これなり。内とは、王城九重の謗り

これなり。この内外を禁制せざれば、宗廟・社禊の神に捨

てられて、必ず国家亡ぶべし。いかにと云うに、宗廟と

は国王の神を崇む。社とは地の神なり。禊とは五穀の

総名、五穀の神なり。この両神、法味に飢えて国を捨て給

うが故に、国土既に日々衰減せり。故に、弘決に云わく「地

広くして敬を尽くすべからず。封じて社となす。禊とは、

い ごごく そうみよう すなわ ごごく かみ ゆえ てんし
謂わく五穀の総名にして、即ち五穀の神なり。故に、天子
こ ところ そうびよう ひだり しやしよく みぎ しじ
の居する所には宗廟を左にし、社稷を右にし、四時・
ごぎよう し つら ゆえ くに ほろ しやしよく うしな
五行を布き列ぬ。故に、国の亡ぶるをもつて社稷を失う
ゆえ さんげだいし くに ほうぼう こえあ ばんみん
となす」。故に、山家大師は「国に謗法の声有るによつて万民
かず げん いえ さんきよう つと しちなんかなら たいさん
数を減じ、家に讚教の勤めあれば七難必ず退散せん」と。
ゆえ ぶんぶん ないげあ
故に、分々の内外有るべし。
こがつじゆうろくにち

五月十六日

日蓮 花押

なんぶのろくろうどの
南部六郎殿